

国営安積疏水開さく事業

郡山市と姉妹都市であるオランダ王国ブルメン市。そのつながりは、オランダ人技術者ファン・ドールンにある。ファン・ドールンと安積疏水についてみてみよう。

安積疏水開さく事業

明治11年(1878)3月7日付けで内務卿大久保利通が、太政大臣三条実美に「原野開墾之儀ニ付伺」を提出している。大久保はそこで「福島県下安積郡対面原近傍諸原野」が「開墾好適ノ趣」であること、水利は「原野最寄猪苗代湖ノ湖水ヲ疏通」すれば灌漑の見込みがたつとしている。

明治12年(1879)10月27日に開成山大神宮において「猪苗代湖疏鑿起業ノ式」が行われ、翌日から安積疏水の開さく工事が開始された。明治15年(1882)10月1日に通水式が行われ、現在まで使用される安積疏水が完成した。

原野開墾之儀ニ付伺

「東北地方原野開墾華士族授産ノ儀ニ付伺」
『公文録・明治十一年・第二十九巻・明治十一年三月・内務省伺(一)』(国立公文書館所蔵)より抜粋
読点「、」を加えた。
原文の細字2行の箇所を()内1行とした。

原野開墾之儀ニ付伺
本年三月六日付ヲ以テ相伺候一般殖産及華士族授産ノ儀ニ付、尚實際ノ緩急篤ト勘考仕候処、二族授産ノ如キハ尤各地方ノ土宜ニ就テ措置セシム可キハ勿論ニ候得共、東北地方ノ如キハ人烟稀疎、從テ所在荒蕪ノ原野散見シ、甚シキハ青森県下三本木原ノ如キ一原野ヲ以テ東西二拾里余、南北凡拾余里ニ連続シ、其間耕地宅地僅ニ百分ノ二ニ居リ、余ハ皆曠漠ノ原野ニ係ルトス、右等諸原野概ネ水木ニ乏シク、且他ノ開墾ノ氣勢ヲ阻ム者(追テ処分ノ方法取調可相伺候)アリテ然カク荒蕪ニ委スルト雖トモ究竟人口ノ乏シキニ坐マルハ万疑ヲ容レサル所故ニ即今已ニ着手シ得ヘキノ地ヨリ、人口増殖ノ方策ヲ建ルハ尤急務ト被存候、因テ其地ヲ調査為致候処、福島県下安積郡対面原近傍諸原野ノ儀ハ、諸般便宜ノ地ニシテ殊ニ四方通達ノ位置ヲ占メ、甚タ開墾好適ノ趣(殊ニ開成山ノ開墾地ニ近接シ、同地ノ事業ヲ助成スヘキノ便利有之)只
一ノ水利ヲ欠クモ、右原野最寄猪苗代ノ湖水ヲ疏通スレハ總テ灌漑ノ見込(此疏水ノ経費許多ナリト雖トモ独リ開墾新地ニ沃クノミナラス、水利ノ及フ所最寄古田ノ早損ヲ防キ、許多ノ利益ヲ生スヘク、又湖畔ニ於テ稍一万石ノ田地ヲ得ヘシト古来ノ唱呼ニ有之候)モ相立候得ハ、此地ヲ東北荒蕪地移住開墾第一ノ着トナシ、之ニ篤志ノ士族ニ限り相応ノ給貸ヲ為シ(平民モ亦同シク移住ヲ許スト雖トモ)移住開墾セシムルニ於テハ則チ同族授産ノ盛意ニ叶ヒ所謂一挙兩得ニ可有之、御許可ノ上ハ尚實際詳悉取調可相伺候条、篤ク御詮議ノ上可然御裁可被下度此段相伺候也

明治十一年三月七日

内務卿大久保利通

太政大臣三条実美殿

ブルメン市ーファン・ドールンのつながり

国営安積疏水開さく事業において基本設計を行ったのが、オランダ人で内務省土木局御雇長工師(技師長)のホルネリス・ヨハネス・ファン・ドールンである。ドールンは、水位観測により得たデータに基づき設計を行った。また、当時安積疏水の通水ルートに3コースが想定されていたが、実地検分を行ったドールンにより沼上峠コースが最も容易であるとして福島県官らを納得させた。

明治13年(1880)にオランダに帰国したドールンは、明治39年(1906)にアムステルダムで死去し、アムステルダム市立一般墓地に埋葬された。

昭和53年(1978)にドールンの墓が、管理契約の期限が切れて、共同墓地に埋葬される予定であることがわかったことから、墓碑再建委員会が結成され、翌年再建がなされた。墓碑再建をきっかけに、ドールンの故郷であるブルメン市との交流が進み、昭和63年(1988)に郡山市とブルメン市が姉妹都市となった。



十六橋水門

国営安積疏水開さく工事はまず十六橋水門から始まった。
画像提供・郡山市



ファン・ドールン銅像

十六橋水門近くに建つ。
像の近くにはドールンの墓碑再建記念碑も建立されている。
画像提供・郡山市